

韓流はなぜ受容されるのか —日中間における韓流の事例から—(要旨)

日本において、昔から「近くて遠い国」と称されてきた国が韓国である。しかし、日韓関係はここ十数年で新たな境遇を迎えた。それは、韓流という韓国文化に対する高い関心のためである。

韓流は、日本だけで起きているわけではない。今や、東アジアや東南アジアだけではなく、欧米や南米まで世界中で受容されている。韓流とは何か。また、人口も国土も日本より小さな隣国、韓国の文化が世界中で受容されるのはなぜなのだろうか。日韓関係だけに注目していると、その実態を見誤る。本論では、そういった韓流に関する疑問に対して、日韓の関係性だけではなく、韓中の関係性にも注目して明らかにするものであり、さらに今後韓流はどうあるべきなのかを考察するものである。

本論ではまず、韓流受容の現状や特徴についてまとめた。現状として、日本では、時期に応じて映画からドラマ、そして音楽というように、高い関心が得られるコンテンツが変化するのに対し、中国ではドラマと音楽が並行して高い関心を集めていることがわかった。特徴としては、映画やドラマといった映像コンテンツはもちろん、音楽(K-POP)においても、見て楽しむといった要素を盛り込み、韓流コンテンツ全体として視覚的要素が強いということが挙げられる。それによって、SNS等を通じて結びついた巨大なファン集団が、写真を撮ったりカバーダンスを踊ったりといった、独特な活動を行う。さらに、韓国の各番組では、世界中のファンがオンラインを通して韓流に対する意思表示ができる仕組みが整っている。オンラインの発達が進む現代の特徴に合わせた受容が可能である点が、世界中で人気となる要因と言えよう。

本論の後半では、韓流をめぐる解釈や問題について取り上げ、先行研究やメディアでの韓流の捉え方について、現状を踏まえた上で吟味した。さらに、従来の生産者や仲介者(俳優やアーティスト)による文化の生成ではなく、消費者の意向を踏まえた文化の在り方を提示した「共生的消費」という考え方を検討した。日韓の2か国間、アジアという地域、あるいは世界全体といったように、対象とする範囲を変えると消費者の特徴や性質が変化する中で、未熟な点も多い韓流に対し、生産者・仲介者・消費者の三者が共に今後の在り方を考えていくことができる文化となることを期待したい。